

# ヒラメの種苗生産

(栽培漁業種苗生産事業)

為石雄司・近藤徹郎

## 1. 研究目的

ヒラメの放流技術開発に必要な種苗（全長30～40mm、70.7万尾）を生産する。

## 2. 研究方法

### (1) 親魚・卵管理

親魚には当部で平成14年に生産した養成魚と地先で水揚げされた天然魚、合計50尾を用いた。餌は生アジを主体とし、産卵期にはアジの表面にアスタキサンチンおよび総合ビタミン剤を添加したものを給餌した。平成18年11月から平成19年2月まで長日処理を、平成19年1月から2月まで水温を15℃に昇温することで産卵誘発を行った。得られた卵は浮上卵と沈下卵に分離し、浮上卵のみを一旦50 t 八角形水槽に設置したネットで1晩流水管理を行い、翌日計数して100 t 八角形水槽に収容を行った。

### (2) 仔稚魚管理

良質種苗生産技術開発と共に、平成17年から大幅な省力化とコスト削減を目的として生産回数を3回から2回に削減した。収容密度は約1.5万粒/tとし、計333万粒を収容した。生産初期は止水換水とし、日齢28日頃から流水飼育とした。止水換水時の飼育水はオゾン殺菌海水を100 t 水槽に貯め、1晩曝気したものを使用し、流水飼育では当初は砂ろ過UV海水を使用し、生産後期には生海水も併用した。飼育水温は疾病および脊椎骨癒合防除のため16℃とした。餌料にはL型ワムシ、北米産アルテミア、配合餌料を成長にともない給餌し、ワムシ給餌期間中はナンノクロロプシスを100万細胞/cc程度となるように飼育水へ添加した。ワムシ、アルテミアの栄養強化にはマリンアルファとマリングロスを用いた。また、早期の配合給餌開始は脊椎骨癒合などの骨格異常を引き起こす可能性があることから日齢30日以降に行った。

### (3) 無眼側黒化・有眼側白化状況調査

サンプルには全長80mmまで各中間育成場で飼育された種苗を用いた。

## 3. 研究結果

### (1) 生産結果

平成19年1月27日から29日にかけて計333万粒の卵を収容し、291万尾（孵化率87%）のふ化仔魚を得た。生産は5月22日まで実施し、全長30～40mm、計62.5万尾（ふ化後生残率21%）を取り上げた。

### (2) 無眼側黒化・有眼側白化状況

近年の無眼側黒化魚は色素の沈着が希薄、もしくはごく軽微で天然魚と区別が難しいという特徴を持つ個体割合が増加している。本年度の平均黒化率は41.0%（前年度：41.4%）であり、そのうち黒化軽微魚は18.2%（前年度：23.8%）であった。有眼側白化は0.4%（前年度0%）という結果であった。

## 4. 研究成果

県内ヒラメ中間育成施設10カ所に出荷を行った。各施設で全長80mmまで中間育成され、6月～7月にかけて県内各地先に放流された